

韓国の外国語教育政策と早期留学 —親の意識から現状を探る—

李炫姪

キーワード：外国語教育 早期留学 雁パパ バイリンガル アイデンティティ

要旨

最近、韓国では小中等教育段階の「早期留学」が年々増加しており、その原因として英語教育の早期化が挙げられている。「早期留学」の増加に伴い、母と子を海外に滞在させ、父は一人韓国に残り、収入の7～8割以上を子どもの留学費用として送金しながら暮らす家族が現れ、その父親は「キログアッパ（雁^{かり}パパ）」と呼ばれている。本研究は、韓国の外国語教育政策を背景に、「早期留学」によって現れた社会問題の一つである「雁パパ」に焦点をあてた。非同居家族の形態を取りながらも「早期留学」を選択する親たちの意識を通じて、「早期留学」の原因と今後の韓国の外国語教育のあり方を考えることを目的とした。

1. はじめに

近年韓国では、子どもの早期留学による非同居家族を出現させ、新たな社会的問題として指摘されている。その原因としては、主に英語の早期教育が挙げられている。しかし、早期留学の増加という問題の背後には、様々な原因が絡まっているものと思われ、必ずしも「英語教育」だけに限るものではないと思われる。そこで本研究では、年々増加する韓国の「早期留学」¹⁾者数の現状から1990年代後半から現れた社会的問題の一つである「雁パパ」を取り上げる。様々なリスクを抱えながらも子どもを早期留学させる親の意識を通じて、「雁パパ」を選択する原因と韓国の教育政策との関連を探ることにする。

2. 研究の背景

韓国の教育人的資源部²⁾は、1955年の第1次教育課程の制定以来、7次にわたって教育課程を改定してきた。

2.1 韓国の外国語教育政策

① 第1次教育課程（1955年制定）：日本では朝鮮戦争として知られる、韓国戦争という背

景を持つ第1次教育課程は、1955年8月1日に制定された。まず中学校において英語教育が始まり、高校においては、英語を含むフランス語、ドイツ語、中国語の外国語科目が設置されていた。但し、この時期は英語がまだ必修科目ではなく、4つの言語から選ぶ選択科目であった。

- ② **第2次教育課程（1963年制定）**：激変期の時代背景を教育に反映し、自律的で能率的な新しい人間像を確立するための教育課程の改編が行われた。高等学校においては、英語が「英語1」と「英語2」に分けられ、また第二外国語が選択科目になった。第二外国語は、ドイツ語、中国語の他にスペイン語が加わると同時に、第2次教育課程期の最後の年である1973年には日本語も加わる。つまり、第二外国語は5言語の中で一つを選択する形になった。
- ③ **第3次教育課程（1973年制定）**：第3次教育課程では英語の場合、文法説明中心の教授法から脱皮することを図った時期であるが、実際の学校教育には変わりが無かったとの批判がある。第二外国語では、日本語を選択する学習者が増えた時期でもある。
- ④ **第4次教育課程（1981年制定）**：第4次教育課程における英語科目では、国際化・開放化という国の情勢指標に合わせて、「活きた生活英語の駆使力」を伸長させる方向の改編をした。第二外国語には第3次教育課程と大きな差は見られない時期であったが、3次教育課程から急増した高校の日本語選択者の数が、5言語の中で1位となった時期として注目された。
- ⑤ **第5次教育課程（1987年制定）**：この時期は、外国語科目全体を通して情報化やオリンピック（1988年ソウルオリンピック）の開催などの時代的要求に呼応できる教育を志向した。文法中心教育から意思疎通能力を向上させる教育へ変わろうと努力しながら、書きことばから話しことばへ、正確性から流暢性へ、と焦点を変えた時期である。一方、第二外国語の場合は選択方式に変更があり、実業科目（農・工・商・水産業、家庭）か第二外国語のいずれかを選ぶ形となった。
- ⑥ **第6次教育課程（1992年制定）**：第6次教育課程には、国際化時代への対応という趣旨のもと、1996年から英語教育が初等学校（日本の小学校）3年生からの必修科目となり、外国語教育の低年齢化が始まった。第二外国語では、高校においてロシア語が加わり、6言語からの選択科目となった。この時期は、急速に変化する時代の背景から、新しい教育課程の改定の必要性が高まった。一方、1994年から大学入試で第二外国語科目を除外することになり、日本語を含めた第二外国語の重要性が低くなった時期でもある。

- ⑦ **第7次教育課程（1997年制定）**：第7次教育課程は、21世紀の世界化・情報化時代を主導する自律的で創意的な韓国人を育成することを目標として1997年に制定、2001年から2002年にかけて段階的に導入・実施され、現在に至っている。まず、第一外国語である英語を「外国語」という名称に変えた。第二外国語科目の変化としては、アラビア語が加わったことと、中学校における第二外国語教育の導入が挙げられ、さらなる外国語教育の低年齢化の動きが始まりつつある。また、2002年度からは選択科目として、大学入試に第二外国語が部分的に導入されるようになった。

以上、韓国における教育課程の流れによる外国語教育政策の内容変化を見てみた。第7次教育課程期である現在、韓国における外国語教育には、外国語である英語が初等学校3年からの必修、全7言語（フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、日本語、ロシア語、アラビア語）で成る第二外国語は中学校の段階から選択できる状況である。第1次教育課程から現在までそれほど長い時期とは言えない教育課程の流れの中で、外国語教育の低年齢化の進行はかなり早いと言える。それに、本年度（2008年）からは初等学校1年生から英語教育を始める方針が進められており、更なる低年齢化が予想される。このような、外国語教育の多言語化および低年齢化の現状は、年少者にとって如何に外国語を母語並みに駆使するかというところまで要求するようになってきつつある。また英語教育の早期化だけでなく、大学の卒業単位における英語能力の比重の拡大などの現状もあり、これらは「早期留学」という社会問題につながっている。「早期留学」者数は年々増加する傾向を見せており、2006年度の早期留学生数は3万5千人を超えている。『世界日報』の記事（2007年1月25日）によると、「義務教育対象である初等学校（日本の小学校）の就学年齢の児童10人に1人が入学を遅らせている」という。親側ではその理由として、子どもの発育不振や健康問題を言っているものの、教育当局では義務教育の違反に対する処罰を逃れるための言い訳であり、早期留学のブームによって相当数の児童が海外に出国した結果ではないかとの予想を報告している。

2.2 教育政策と現状問題

では、「早期留学」を選択する理由は「英語の早期教育」だけの問題であろうか。もちろん、留学者数の増加には英語の早期教育の現状との関わりが深いものの、他にも次のような幾つかの現状との関わりも考えられる。

- ①頻繁な入試制度の変化による不安
- ②英語の早期教育による私的教育費の増加
- ③学校教育への不満
- ④より良い教育環境への要望

まず、教育法の頻繁なる改定による入試制度の変化が考えられる。教育課程の改定は、教育問題が発生することによってより質の高い教育を求めるための要因もあるし、政権が変わることによる要因もあると思われる。しかし、受験戦争の激しい韓国の教育実情における入試制度の頻繁な改定は、生徒と親側にとって不安と不満の元になっていると思われる。また、英語の早期教育は、これまで親への負担となっていた私的教育費の更なる負担をもたらしている。その負担に比べて、学校教育は満足できるものではないことと、受験戦争の激しい韓国社会から逃避しより良い教育環境の中で教育させたい、あるいは早期留学を選ぶことでバイリンガルになる可能性を高めたいとの判断を下した結果であると予想できる。

韓国の大都市である京畿道が行った調査によると、調査対象者の42.7%が「早期留学をさせる意向がある」と答えている。その理由に関してはやはり「語学学習」への意識が最も強かったものの、他の理由もかなり高い割合を占めていた。(ハンギョレ新聞2007年1月22日)

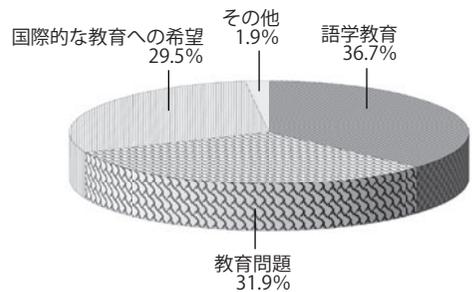


図1. 早期留学に関する意識調査

では、言語的バイリンガルを目指すだけの早期留学ではないとしても、早期から海外に出かける目標の一つとして指摘されている「バイリンガル」とは、誰のためのものだろうか。親側の勧めであれ、子ども本人の希望であれ、早い時期における留学がもたらす期待として、子どもの言語における「バイリンガル」は大きいものであると思われる。確かに「臨界期仮説 (Lenneberg1967)」から推察した場合、小学校以前の段階から留学に発つ韓国の早期留学の現状は、発達過程における言語獲得能力の面での優れた結果を期待できるかも知れない。しかし、早期留学した留学生たちによる犯罪問題が最近頻繁に取り上げられている点は、自己アイデンティティの形成もままならぬ年少者たちが、親たちの希望、韓国の教育現実からの逃避、あるいは単なるバイリンガルへの安易な目標だけを持って発つてしまう「早期留学」の現状から始まっていると思われる。同時に「早期留学」をもたらした背景にある、韓国の異常な教育競争心および教育政策レベルにおける問題などは、今

後の教育課題も大きいことを示唆している。

3. 「雁^{かり}パパ (キログアッパ)」とは

「雁^{かり}パパ」とは、韓国語の「기러기아빠; キログアッパ」を訳したもので、現在韓国における新たな非同居家族の形態によって現れた父親を喩える用語である。具体的には、「母親と子どもを早期留学させ、父(아빠; アッパ)は一人国内で残り、収入の7~8割以上を子どもの留学費用として送金しながら暮らす父親の存在」を指す。「雁(기러기; キログ)」を用いる背景には、「雁」という鳥特有の性質がある。「雁」は夫婦間の仲が良い鳥と知られ、韓国の伝統的な結婚式では一生を共にする象徴的な意味を持っている。特に、子どもへの愛情は格別で、如何なる目に会っても子どもを見捨てることは絶対しないといわれている。韓国の『朝鮮日報』では、「『雁』の習性が21世紀の韓国の教育実情を最高に比喻することになった」と伝えながら、年々増加している海外への早期留学者数の現状を指摘している(2004年11月28日紙)。同紙によると、雁^{かり}パパの送金額は月平均400万ウォン以上(日本の約40万円)と見られるとしている。近年は、寂しさだけでなく経済的な問題や夫婦の不仲など、様々な要因が絡まって自殺に至る「雁^{かり}パパ」の社会問題が指摘されており、より難しく敏感な話題になっている。

「雁^{かり}パパ」ということばは学術用語ではないため、研究によっては様々なことばの用い方をしている。韓国の教育実情が生んだ「雁^{かり}パパ」の現状について近年日本でも取り上げる例が増えてきており、「雁^{かり}パパ」の他に「雁^{がん}パパ」や「かもめ父」などのことばの用い方もあるが、本研究では主に「雁^{かり}パパ」あるいは「非同居家族」ということばを用いることにする。

4. 先行研究

「雁^{かり}パパ」の問題を直接的に取り上げた研究はまだ少数である。엄명용(オンミョンヨン)(2002)は、教育の現実から現れた「雁^{かり}パパ」の登場背景を論じながら、雁^{かり}パパ7人のインタビューから家族の概念を明らかにしようとしている。なかでも、家庭内の不調和が非同居家族という突破口を選択する場合もあることについて指摘した点は興味深い。一方、김양희, 장운정(キムヤンヒ、チャンオンジョン)(2004)の研究では、高収入の専門職であることが多かった「雁^{かり}パパ」が、中収入レベルの家庭にまで拡散している現実を指摘しながら、これは欧米社会では見られない学歴中心の社会構造と子供中心的な家族文化が作り

出した韓国独特の現象であるとしている。조은 (チョウン) (2004) の研究では、雁家族を5つに分類し類型化している点で興味深い。そして、最も多様な角度から雁パパ問題に接近している최양숙 (チェヤンスク) (2005) では、雁パパ20人のインタビューを通して、変化をもたらす精神的・倫理的な側面、いわゆる出世中心や物質中心主義、外形中心主義などの人間としての価値観が現状における問題であることを指摘している。そして研究の課題として、早期留学による子どものアイデンティティ問題や、子どもが持つ父親像や家族という概念は如何なるものであるかに関する縦断的研究が必要であることを指摘している。

これまでの先行研究を踏まえた上で、本研究は、早期留学を選択する背後にある親の意識と言語政策の現状における問題との関連を探るものとして位置づけたい。³⁾

5. 調査概要

インタビューデータは、雁パパ8人(主に5人)を対象に2006年8～9月にかけて行った調査結果であり、インフォーマントのプロフィールは以下のようになっている。厳密に言えば、網掛けになっている5人が「(本物の)雁パパ」で、L2、Y2、K2の3人は多少異なる立場である⁴⁾。しかし、韓国における教育政策の問題や教育現場の問題などに関する客観的な意見者としてインタビューに加わってもらった。なお、インタビューは録音の了承を得た上で、半構造化インタビューで行われた。

表1. インフォーマントのプロフィール

	年齢	職業(子ども)	子どもの留学先		年齢	職業(子ども)	子どもの留学先
P	47	自営業(娘1)	インドネシア	K1	48	歯科医師(娘2)	アメリカ
J	50	教授(娘1、息子1)	アメリカ	L2	45	教授(息子1)	韓国ソウル市
Y1	58	教授(息子2)	アメリカ	Y2	36	教授(娘2)	
L1	48	教授(息子1)	アメリカ	K2	39	教授(娘1、息子1)	

そして、主なインフォーマント5人の「雁パパ」になった背景が次である。

P	大企業で働いていた1997年、インドネシアのジャカルタ勤務の発令により、娘が小学校5年の時家族皆で渡った。5年後韓国に戻る際、母親と娘はジャカルタに残ることになり、Pさんは雁パパになる。現在は自営業を営んでいる。
---	--

J	娘さんは小学生、息子さんは幼稚園の時、Jさんの学位取得のため米国に留学。学位取得後、韓国に就職が決まったためJさん家族は帰国する。しかし、韓国の学校に適応できなかったことと、娘さんがアメリカで勉強したいという意思が強かったため、子どもたちは奥さんと一緒に再び留学、Jさんは雁パパになる。
Y1	1981年アメリカに留学し、次の年に結婚、長男と次男が生まれた。1990年、韓国に就職が決まり帰国するが、子どもたちはアメリカ生まれアメリカ育ちであるため自然に現地に残る形となった。現在、奥さんもアメリカで大学教授になっているため当分雁パパの生活は続きそうである。
L1	Lさんの留学でアメリカに行き、息子さんが5歳になった時韓国に帰国する。しかし、息子さんが小学校4年になった頃、アメリカで勉強したいという意思を見せたため、母親と共に留学することになり、Lさんは雁パパになる。
K1	歯科医師であるKさんは博士学位を取り、ニューヨークで病院を開業したい希望から、娘さんが小学校1年と5歳の時アメリカに行く。しかし、アメリカでの開業は諦めて帰国することになるが、現地に慣れてしまった子どもたちと母親の意思で、一人で帰国、雁パパになる。

特に注目する点は、今回のインフォーマント8人中6人が大学教授であることが挙げられる。つまり、学位取得のため自ら留学し、後で奥さんと子どもが現地に残ったケースが多いため、わざわざ早期留学をさせたわけではない、いわゆる「自分たちはオリジナル雁パパとは異なる」という意識から応じてくれたことが想定できる。それに、休みがしっかり取れる点で家族に会いたい時は定期的に会いに行くことができるという意識も働いているように思われた。実際、インタビューのなかでもJさんによる「この学校だけでも雁パパって2～30人はいるもの。大体10%ぐらいはいると思う。韓国の雁パパの中では大学教授が一番多いのでは。」という指摘があった。

以下では「雁パパ」の発言KJ法に基づいて分類した結果から、次の3点に絞って分析内容を述べていく。

- ①子どもの早期留学と「雁パパ」の生活に関する意識
- ②子どもの言語的バイリンガルに対する評価
- ③子どものアイデンティティに対する評価および働きかけ

まず、子どもを早期留学させ「雁パパ」になった背後にある意識を探ることで、年々増加しつつある早期留学が何から起因しているかを考察する。そして、早期留学の要因として最も挙げられている英語の早期教育と関連し、早期留学の選択が果たして言語的バイリンガルという目標の達成につながったのかどうかを探る。そして、早期留学による問題と

してよく指摘される子どものアイデンティティの面で、親はどのような評価をし、その評価と留学の持続には如何なる関連があるのかを探りたい。用いる文字化分析は主にインフォーマントのプロフィールにおける網掛けの5人の発言を中心にして抜粋したものの、場合によっては他の3人の発言も一部取り入れる。

6. 分析と考察

6.1 子どものためなら

韓国の親にとっては「子どものためなら親は犠牲になって当たり前」という「子どものためなら」との意識が強く、家族の生活自体も子どもの教育が中心となっている傾向が強い。(I: インタビュー) (インタビュー: 韓国語、和訳: 筆者)

P	戻れば慣れるからと言ったけど、どうしても行かないと言うんで、仕方なく。 <u>私の意思で連れてきてても子どもがうまくいかないことがあったら大変だし、だからおいて来ました。</u>
I	周りから言われた適応できない理由としてはどんなことがあったんでしょうか。
P	一番の問題はワンタ(「いじめ」を指すことば)、それですね。

J	ここの小学校の教育もちゃんと受けてないまま中学校に入学させたら、なかなか2人とも慣れなかったんです。もともとうちの娘はアメリカで法科大学に行きたがってたので、ここで勉強はしているものの気持ちはアメリカに行ってるのが目に見えたんです。自分がアメリカのどこの law school に行きたいかなども調べておいたりしてたので、仕方なく送ったんです。
I	なら反対は全然無かったですね?
J	それは <u>反対がある訳が無い、子どもが行くことなのに。経済的に支援ができるなら、それは当然行かせるべきでしょう。</u>
I	その分、お父さんが我慢しなければならぬ部分とか、いろいろあるわけじゃないですか。
J	それは我慢するしかないでしょう。

K1	とにかく行かせる人なら行かせて良い、英語が上手だからといって皆が留学できるわけでもないし、行かせる余裕のある人は行かせても良いと思う。しかし、 <u>それができない人は韓国でやらせない、だからいろいろ言われるわけだし。</u>
----	---

まず、Pさん家族の場合、Pさんの転勤がきっかけで家族一緒にインドネシアのジャカルタに移動した。5年後、Pさんは韓国に戻ることになるが、奥さんの意思によって奥さんと娘さんはジャカルタに残ってPさん一人の帰国となったのが「雁パパ」になった背景である。奥さんと娘さんがジャカルタに残った理由として、帰国後のいじめ問題の発言が見られ、波線のように、子どもに問題が生じる場合は「親の責任である」というPさんの意識は、韓国の親たちの意識が窺えるものである。

また、Jさんの発言でも「子どものためなら」の意識によって「雁パパ」になった背景が見られる。Jさんの「反対がある訳が無い」という発言は、親として子どもの教育のためには如何なる困難も我慢すべきであるという意識を表しており、このような「子どものためなら」の意識はインフォーマント全員から見られる共通意識であった。特に、「経済的に支援ができるなら、それは当然行かせるべきでしょう」の発言からは、経済的な支援の可否が「雁パパ」になるための基本条件であるという意識が窺える。実際、主要インフォーマント5人の送金額は、Pさん「500万ウォン」、JさんとY1さん「給料の70%」、L1さん「年5万ドル」と答えており、経済的な支援が許されないと早期留学は難しいと予想される。経済的な支援に関連しK1さんの発言では、経済面における基本条件がない人たちが雁パパになったことが、様々な社会的問題を起こす原因になっているという意識が窺える。つまり、子どものために「父親は経済的な部分を担当」し、「母親は子どものお世話と教育を担当」という、夫婦の役割分担が、今の「雁パパ」現実を生み出していると考えられる。

しかし「子どものためなら」とはいえども、次のように雁パパ側が持つ寂しさや不便さは存在するものである。

P	私が大変です。これ、まあ李さん（筆者）も40ぐらいになったら分かると思うけど、これ <u>家族が離れて過ごすというのが普通のことじゃない。</u> （中略） <u>家族がいなくて駄目、隣にいないと。</u> （笑い）今ちょうど2年になったけど、2年が限界だと思います。
I	娘さんや奥さんのほうはどうですか。満足してますか。
P	それで正しかったのか、家族と一緒に住むのが正しかったのか、という考えをたまに話し合います。勉強なんか多少できるといっても、それが別に素晴らしい光栄をもたらしてくれるわけでもないのに。それに、この少しでも若いこの瞬間が私にとってもものすごく重要な時なのに、 <u>家族が離れ離れしていることはおかしいのでは、</u> という話を娘もたまにしますね。

J	とりあえず平日だと学校に出でずっと忙しいから何も考える余裕が無いんですよ。しかし、土曜とかになって公園とかを通る際に、 <u>家族で座ってお弁当を食べたりする風景を見ると、それはやはり気持ち的に悲しいというか。</u> あとは、お盆やお正月の日に、 <u>他の兄弟は皆家族が集まるのに、私だけ一人だったりするから、それが一番大変だった。</u> 他は別にありません。
I	そんな面を考えると、家族と一緒に過ごせることってすごく大事なことでないですか。そんな時間を過ごせなかったという点で後悔は？
J	その犠牲は仕方なかったことだし、その犠牲が正しかったかどうか今は何とも答えは出せません。そんな犠牲があって子どもがやりたい勉強ができたから良かったのか、あるいは家族が皆で苦楽を共にして過ごしたほうが良かったかは、 <u>未だに判断はできません。</u>

Pさんはインタビューの中で「家族」という概念を何度も強調しているのが特徴的である。また、子どもが留学できた点に関しては満足しているものの、「家族」が離れ離れでいなく

ればならない現実との間では「留学させたことが正解か否か」に関する判断を下すことはできない気持ちがJさんの発言で現れている。

雁パパの「子どものためなら」の意識の中では、経済的な支出はもちろん家族非同居による寂しさや不便ささえも当たり前のこととして受け入れている。自分を犠牲にしながらも、雁パパの役割を果たす背景としては、「期間限定」と「満足」の2点が窺えた。つまり、子どもが大学に進学したら母親は帰国することが一般的であることから、「期間が限定されているから我慢できる」という意識、そして「子どもがやりたい勉強をさせることができるから」という満足意識が存在していた。では、雁パパは子どもを早期留学させた目標の一つである言語的な面に対しては現在どのような「評価」をしているのであろうか。

6.2 言語的評価

「バイリンガル」は二言語の到達度によって、完全バイリンガル (proficiency bilingualism)、部分的バイリンガル (partial bilingualism)、制限的バイリンガル (limited bilingualism) の3種類に分類できる (小柳 2004: 162-163)。今回のインタビューで現れた子どもへの言語評価における特徴は、最初に「韓国語も英語も上手」という評価から、インタビューが進むにつれてどちらかに問題があるという部分的バイリンガルとしての評価を下す例が多かった点が挙げられる。

J	<u>英語を韓国語にする場合は、どうしても韓国語の表現能力はちょっと足りないでしょうね。特に何か文書を高級(上級)化するとか、文章を高級語彙で表すときは、ちょっと問題があるでしょうね。逆に韓国語を高級な英語に変えることは易しいけど、反対になると難しく感じるようです。</u>
I	ああ、実際にそんな場面をご覧になったことがあるんですか。
J	以前、韓国に来たとき、ある学会の通訳をしたことが1回あって、私も参加してみたけど、 <u>英語では意味が分かるんだけど、韓国語でどう表現するか分からなくてつまずいたりしました。</u>

Jさんは最初、娘さんの言語について両言語とも大丈夫であると評価していた。しかし、話が進むと「英語がもっと楽」という結論を下すことになる。一方、次のY1さんの場合は、子どもがアメリカ生まれアメリカ育ちである点から、英語が母語であると認識しつつも、家庭内では韓国語を使用することに心掛けている点を強調している。

I	つまり、生まれてから息子さんたちはずっと英語が主な言語になったわけでしょうね。
Y1	もちろん、 <u>英語が母語だよ、彼らは。</u> (中略)
I	でも冗談などが通じないときって寂しいと感じたりは？
Y1	そうですね、うちの家族は皆良いんだけど、 <u>最も重要なことが、コミュニケーションが円滑にいかないってこと、ただ勘で分かり合ったりするの。</u> でも兄弟同士ではコミュニケーションがうまく通じるわけ、またうちの夫婦は夫婦同士でうまく通じるし。

しかし、韓国語の使用はなかなかうまくいかない状況で、それによる家族間のコミュニケーションが円滑でないことが「ただ勘で分かり合ったりするの」という発言で現れている。つまり、夫婦同士でのコミュニケーションと兄弟同士でのコミュニケーションはうまくいくものの、家族全体になると円滑なコミュニケーションが取れず「勘」で分かり合う現状が窺えた。次はL1さんとK1さんの発言の一部である。

I	言語的な面では普段息子さんとは韓国語ですか？
L1	<u>絶対的に韓国語。</u>
I	お母さんと息子さんでもですか？
L1	ええ、韓国語。うちは英語の勉強のために家の中で英語を使うことは絶対しない。英語は今後生きていくために何とかやっていくだろうし、外でいっぱい使うだろうから。(中略)友達に会ったときはもちろん全て英語で、 <u>英語での会話には全く不便は無いけど、でも家族との話し合いでは韓国語。</u> 他の家では英語の勉強のためにわざと英語ばかり使ったりする例もあるだろうけど、うちはそんなことはしない。

K1	そう、 <u>韓国語を使わなきゃ。</u> なぜならまずお父さんが不便だから(笑い)必ずそうじゃなくても、 <u>だってバイリンガルで韓国語ができないというのは話になりませんから。</u> むしろ英語が下手なほうがましさ。(中略)「韓国語だけ喋れるよりは英語だけ喋ったほうがいい。しかし、英語だけ話すことは、韓国語だけ話すことと同じだ。だから、英語も韓国語も同じくうまいことが今後成功するんだ」と私は常に言ってる。
----	---

L1さんの場合は、英語と韓国語の使い分けをはっきりすることで、バイリンガルである点を暗示しているように見える。しかし、Lさんの息子の場合、留学と帰国を2回にわたって繰り返しており、両言語の運用能力は評価しにくいケースであると思われる。一方、K1さんの場合も、子どもの言語レベルに関する具体的な評価は出ていないものの、バイリンガルにおける母語運用能力の重要性を強調している。

今回のインタビューでは、L1さんとK1さんのように、バイリンガルにおける母語の重要性に関する主張はするものの、実際に自分たちの子どもに対する言語評価はあまり言及

しない例が見られた。また、JさんとY1さんのようにどちらかのバランスが取れていない「部分的バイリンガル」であることが話の進むなかで現れる例も見られた。次のPさんの例は、客観的な立場から子どもの言語を評価している。

P	<p>でも一つ、語学について言うと、周りでみんな「<u>なら、お前の娘、英語はペラペラだろうな</u>」と言うけど、<u>英語うまくありません。うまくなるはずがない。だからそんな話を聞くたびに私は心が痛むんですよ。国語勉強したときを思い出してみてください。教科書が真っ黒になるまでいろいろ書き込みながら勉強したじゃないですか。だから、我々がレポートを一つ作成するときも様々な表現を含蓄のあることばで意味伝達をするわけです。うちの娘もなんか作文みたいなものをやってるんだけど、でも、私たちが韓国でちゃんとした韓国語を勉強していれば深みのある意思表示ができるんです。(中略)だから他人に比べたら、<u>国語もこれぐらいは分かるし、英語もこれぐらいは分かるの。でも、その深さを見るとこれもあれも深みが無いってわけ。そんな側面がいろいろあると思いますよ。そんな面を韓国人はあまり見通さないまま、ちょっとだけ何かあったらすぐ英語のために海外行かせる行かせると言うけど。国語がしっかり分かる人は、英語を学ぶときも深みがあるんですよ。私も会社の生活の中で英語のことでいろいろとストレスを受けたからよく分かるけど。そんな問題は今後も大きくなると私は思う。だから、アメリカに留学に行ってきた裕福な若者たちが起こすいろんな社会的問題などもそんなことと関係していると思う。</u></u></p>
---	---

バイリンガルは周りで下す評価であり、実際は両言語とも中途半端である「制限的バイリンガル」である点からの今後の不安について語っている点は興味深い。特に、バイリンガルに対する安易な目標だけを持って選択する早期留学が、若者の犯罪のような社会的問題にもつながる恐れがあることを主張しているPさんの指摘は、今後早期留学とアイデンティティ確立の関連についても考えていく必要性を感じさせると言えるだろう。

6.3 早期留学とアイデンティティ⁵⁾

教育の本質は健全な思考を持つ人間に育てることであり、その中で重要なのが「アイデンティティの確立」である。親の意識では、アイデンティティ形成前の子どもたちが新たな国に渡った場合、「モノリンガル」から脱皮し「マルチリンガル」になることを期待する面があると考えられる。しかし、子供にとってはアイデンティティの混乱により、両社会のどちらでも自己を確立できない人間になる可能性もあることを留意しなければならない。子ども一人での早期留学が多かった1990年代には、留学先での若者の犯罪や不適応によるUターンなどの問題がしばしば指摘された。これらは結局、自己アイデンティティの形成もままならぬ状況での留学によって、自分のアイデンティティに混乱を感じたことが

原因の一つとなったと思われる。以後、雁パパの登場によって、母親が同行する早期留学が増えた点で、一人留学に比べては犯罪を起こす若者やUターンする人も多少は少なくなっているのではないかと予想される。しかし、家族が非同居という形を選択する早期留学は、子どもにとって「家族」という概念に対する認識の薄さ、父親の不在による存在の薄さなど、親にとって抱える不安要素も多いはずである。言い換えると、例え離れた外国にいても、子どもが「家族」の概念や、韓国人としてのアイデンティティをはっきり持つことができる場合、「雁パパ」の決断について満足することになるのではないか。ここでは、子どものアイデンティティ形成について、離れている雁パパとしてどのように評価しているか、また親として如何なる働きかけや努力をしているかを、データから考察してみる。

① 親としての評価

インタビューでは、韓国人としてのアイデンティティに関する親それぞれの意識が窺われた。

K1	<p>たまには不当な待遇をされた話をしたりすると、私は「<u>ここは他人の国よ、あなたがいくら永住権を持っていたりしても結局よその国だから。こんなよその国でそれぐらい待遇は覚悟しないと生きていけない、大丈夫。お前は韓国人だから</u>」とはっきり言ってあげます。</p> <p>(中略)「あなたは韓国人だから、どうせ韓国と関連のある仕事をしなければならない。となると、韓国語が下手なら何にもできない」と。</p>
L1	<p>私も子供が4年生のとき向こうに行ったとき感じたこと、父としてのプライド。その日「すぐ荷物片付けて、韓国に行こう、もう送金しないから」と。もし<u>家族が再び形成されたあとならもう一度行っても良いから、今は帰国しようと言った</u>。だから正直言って、そのときは子供の意思とは関係なく戻した部分もありますけど。とにかくさっき言ったように最も重要なポイントは、人間が生きていくなかで家族という存在がなくなったのに何のために生きていくかということ。</p>

K1さんの場合、子どもたちには常に韓国人としての意識を持たせるように努力しているとのことをインタビューのなかで何度も繰り返していた。将来、韓国に関連した仕事をするためにも、韓国人としての意識、特に韓国語能力は必須であることを強調している。

L1さんの発言も韓国人として、韓国特有の家族観を如何に重視しているかが分かる。前述した通りL1さんの息子は、留学と帰国を2回繰り返している。そのうち帰国の原因の一つが、家族への認識が薄くなったことを父親が感じたことがきっかけになった強制帰国だったことが話の中から窺える。L1さんにとっては家族と離れている現実から家族観を絶対化し、子どもにも認識させるべきであるとの意識が働いた結果であることが予想される。し

かし、息子にとっては留学と帰国の繰り返しによって、アイデンティティ形成上の混乱を感じた可能性も考えられる。つまり、離れている家族が家族としての強い意識を維持することが如何に難しいことであるかを感じさせる例である。

しかし、次のJさんの場合は、アメリカ化した子どもの意識をそのまま受け止めていて、K1さん、L1さんとは対照的である。

I	親から見て韓国人としてのアイデンティティの確立という面ではどう思われますか。
J	まあ、 <u>ほぼアメリカ化したと考えたほうがいいでしょう。</u>
I	ええ、たとえば？
J	たとえば、親子間の情に関して話したりすると、韓国はねばねばした情じゃないですか。でも、子どものほうはそれが理解できないみたいで、「なぜ」と言われますね。
I	ええ、そんな時はどのように結論が、
J	結論は無いけど、 <u>親として理解してあげるしかないですね。(中略) 一生アメリカに住むならむしろアメリカ人になったほうが良いし、韓国に住むなら韓国人になるし。</u>

Jさんの場合は、将来娘がアメリカ社会で活動することを期待している点から、「一生アメリカに住むならむしろアメリカ人になったほうが良い」とアメリカ社会への同化を納得しているが、その納得の背景にも「親として」という意識が現れている点は特徴的である。但し、将来どの社会で活動するようになるかは別に、韓国としてのアイデンティティの確立は重要であると思われる。このJさんの状況に似ているのが、アメリカ生まれ、アメリカ育ちであるY1さんの息子の例である。

Y1	母国という感じは無いでしょう、彼らにとっては。私がいつも母国母国と言うから母国かと漠然に考えるけど、母国に対する感情みたいなものはあまり無い。(中略)私が行くたびに話す。まずは先祖が誰かというのを教えるし。しかし、教えても、歴史みたいなものを教えても興味も無いです。まあ、そんなものかぐらいの反応しかない。
I	それに関してY1さんは仕方ないことだと思っていますか。
Y1	そうですね、子どもも成長してしまっし、大学も卒業したりした今になっては。でも私が最も感じるの、2人とも韓国語は必ず学ばなきゃという、 <u>どこ行っても私は韓国人だし、それは彼らが誰よりもよく知っていることだから。昔はちょっと嫌だった部分もあったようだけど、今は自ら韓国人であることを自信持って言うし、足りない韓国語力をどう補うかについても努力します。(中略)大学のときは韓国語の授業をとったりして、外でも韓国人と遊んだりして、最近になってむしろ韓国語がかなりうまくなった感じ</u> です。

しかしY1さんの場合は、アメリカ化した子どもに対して仕方ないことであるとの認識を持っていながらも、完全に同化するのではなく、韓国としてのアイデンティティを確立

させようとする働きかけをしていること、そして息子自ら徐々に自己アイデンティティを認識していることに期待を持っている点でJさんの例とは相違している。

以上の例から、将来韓国に戻って韓国社会で、あるいは韓国と関連した仕事をするようになるに期待する場合、韓国人としてのアイデンティティの重要性を強調する親の認識例と、アメリカ社会で活動することを期待する場合、むしろアメリカ化で良いのではないかと認識する例が見られた。将来、韓国社会で活動しようが、アメリカ社会が舞台になろうが、自己アイデンティティをしっかりと確立してこそ、自らの能力や資質を周りの環境と調和していくことができる人間として成長すると思われる。国を離れて、父親という存在とも離れている環境、そして言語および文化的背景の異なる環境、その中で子ども自ら自己アイデンティティを確立して行くことはなかなか難しいことである。特に、国を離れた時期が早ければ早いほど、韓国人としてのアイデンティティの確立は困難であることが予想できる。つまり、親としての評価とは別に、子ども自身は異なる社会の中でアイデンティティに混乱を感じる場面に遭ったり、本来一緒にいるべき家族がわざわざ離れて過ごす生活を選択したことによる家族観を中心とした個人的あるいは文化的アイデンティティに混乱を感じたりすることの可能性については十分注意すべきである。その点で、子どもに国や家族、親子関係などに関して認識させる親の役割は大変重要であると言える。

② 親としての働きかけ：旅行、メッセージとチャット、関心

家族観および親子の関係というのは、子どものアイデンティティ形成において重要な一部分であると思われる。雁パパにとっても、家族観および親子関係の再確認や維持のために、様々な働きかけをしていることがインタビューのなかで現れた。働きかけの一つとして「家族と旅行する時間を持つ」ことがある。

P	向こうに会いに行くのと、いつも真っ先にやるのが家族でインド洋のほうに出かけることなんです。または、家内とゴルフに出かけたり。
I	旅行の際には娘さんもいつも一緒ですか。
P	ええ、一緒です。(中略) 向こうにいたときはかなり旅行も行ったんですよ、ヨーロッパや東南アジアなど。今も大変な時とかは、家族と旅行したときを思い出すと癒される。やはり家族は一緒にいて、何かいろんな思い出ができないとダメ。

I	生活の余裕が出てきた今でこそ、もし家族が皆韓国で生活しているなら、これをやってみたいというの？
J	まあ、 <u>そうなら一緒に旅行することでしょう。</u>
I	家族4人で旅行に出かけてことは？
J	あまり無いです。以前もあまりなかったけど、特に雁パパになってからは1回も無い。 <u>以前は貧しい留学生の生活だったから旅行する余裕が無かったし、後は家族が離れてしまったからできなかったし。</u>

Pさんは、時間が許される限り家族との旅行を重視していると言う。それには、家族関係を再確認する面もありつつ、Pさん自身にとっては「雁パパ」としての寂しさを紛らわす思い出として貴重な部分であることが窺える。

一方、旅行という働きかけができなかったJさんのような例もある。Jさんの場合、家族として旅行に出かける意味の重要性を認識しているながらも、離れている状況で一緒に旅行をする機会を持つことの難しさを話しており、Pさんとは対照的である。特に、経済的な余裕がなかった理由で旅行ができなかった過去に比べ、現在は経済的な余裕はある反面時間や家族の非同居によって旅行ができない現実に関する語りはより印象的である。但しJさんにとって、家族観の再確認や維持のための「旅行」という働きかけは無いものの、普段の娘との連絡手段として「画像チャット」を用いている。

I	普段連絡はどのように？
J	画像でチャットですね。電話して、今からパソコンつけて、って言って。 <u>ほぼ毎日連絡する。</u>
P	ええ、電話もするし、最近はメッセージャーで。私は事務室でいつもメッセージャーはオンにしておくので娘が学校から戻るとたまに入ってきます。「パパ、学校行ってきたよ」と。
Y1	休みになると私が1ヶ月以上向こうに行くし、 <u>普段は1週間1回ぐらい電話をする。あとは、チャットかな。パソコンつけたらすぐチャットという感じで。</u>

IT先進国の父親らしく、チャットを通して娘との連絡を毎日行うことで、離れて過ごす距離感を補うとともに、父親としての存在もアピールしていることが予想できる。최양숙(チェヤンスク)(2005:140-142)では、雁パパの連絡手段として最も多く見られたのが、「電話」であり、「メッセージャー」あるいは「チャット」の場合、「大学教授は教え子からメッセージャーや音声チャットのやり方を教えてもらう場合が多いが、常にそれを利用することに関しては負担と感じている」と報告しているが、今回のインタビュー調査で現れた限

りでは、電話はもちろんメッセージとチャットの利用も日常的になっていることがJさんの他、Pさん、Y1さんの発言からも分かる。

一方、雁パパとしての家族観の再確認および維持のために、「継続的な関心」を見せることが最も重要であるという指摘が次のL1さんの発言から見られる。

L1	会話が十分ではない分、 <u>継続的な努力を見せられるイベントを常に考えることです。休みのときは必ず会いに行って会話をするとか、(中略)家族としてのイベントを重視することと継続的な関心。最後は、実際に役立つ進路に関連したアドバイス。</u>
----	--

以上のような「旅行」や「メッセージとチャット」、「持続的な関心」などの働きかけこそ、離れている家族としての家族観維持の手段であり、子どもに家族観と父親像を確立させるための「雁パパ」としての努力であるとも言えるのではないか。この努力によって、子どもが自らアイデンティティをしっかりと形成し、自分が進むべき道へ進んでいく姿が見られれば、雁パパとしては非同居家族の選択が間違いではなかったと安心することにつながっているのが現実であると思われる。

7. まとめと今後の課題

以上、雁パパ5人のインタビューデータを通して、「雁パパ」の登場背景の一つとして、韓国の教育や家族観における「子どものためなら」という視点が加わっていることを考察した。また、子どもの言語とアイデンティティ問題に対しては如何なる評価を下しているかについて「雁パパ」の立場から接近し考察してみた。言語的な面の評価では、最初は「完全バイリンガル」であるという評価から、時間が経つにつれ「部分的バイリンガル」という評価を下す例があった。また、最初から「制限的バイリンガル」という評価を下すPさんのような例もあった。一方、アイデンティティの面では、今後韓国社会に戻ることを想定した場合と、韓国社会には戻らずアメリカ社会で活動することを想定した場合で多少評価の差が見られたものの、韓国人としての意識や家族としての意識を強調し様々な働きかけをしている点では共通していた。

インタビュー内容の結果からみると、もし早期留学が言語的バイリンガルだけを目指すものなら、その目標が達成できたと言える例はあまり見当たらない。それでも、子どものアイデンティティ問題や家族観の維持などに心がけながら「雁パパ」の役割を続けられる、あるいは続けられた背景には、受験戦争や私的教育費の問題などといった韓国内の教育環

境から脱し、より良い教育環境で勉強させたいという認識が働いているのではないか。私的
教育費に関する問題や、学校教育への不満などに関する次の発言からも「雁パパ」の役
割が果たせる親の認識が想定できる。

L2	私はできる限り塾には行かせないようにしていましたが、やはり高学年になるとどうしても限界を感じて、結局失敗したわけです。
K2	塾で既に習ったことを教師も分かっていて、「もう説明しなくてもいいのね？」と言うらしいです。だから、生徒も教師を無視しちゃう現実ですもの。(後略)

つまり、親たちの学校教育への不信が、私的教育に依存する結果となり、それが教育目
標と教育現実とのズレにつながっているのではないかと思われる。受験戦争が続く限り、
そのズレを縮めることはなかなか難しいものの、韓国社会が抱えている「早期留学」と「雁
パパ」の問題を解決するためには、早期留学が必ずしも英語教育だけを視野に入れたもの
ではないという点をしっかり把握し、行政レベルと教育現場レベルの協同によって教育現
場の位置を取り戻すことに全力を注ぐ必要があると思われる。

しかし韓国では現在、教育現場の位置を取り戻す努力ではなく、新たな英語教育の方針
を発表、その発表に対する国民の非難の声が高まりつつある。2008年新大統領を迎えた韓
国では、新政府の発足に向けての体制を整える作業のなか、新たな英語教育政策として「学
校の英語の授業は韓国語を使わずに英語だけで行う」という案とともに、2万以上のネイティ
ブ教師を配置すると発表した。この政策案は、学校の英語教育をより強化することで、早
期留学のブームによって増加してしまった「雁パパ」問題を解決しようという趣旨から揚
げられたものと伝えている（『朝鮮日報』2008年2月5日）。しかし、これは早期留学と「雁
パパ」が登場した原因を、「英語教育」の問題としてしか捉えていない政府側の判断による
ものと考えられ、この安易な判断が発表されてから、早期留学への問い合わせはより増え
ている現状となっている。何が教育の問題になっているのか、何が早期留学を選択してし
まう現実を起こしているのかという明確な判断と対処を考えていかないと、早期留学と「
雁パパ」の存在は当然韓国における社会現象の一つとして続く可能性がある。さらに「雁
パパ」を生み出す早期留学の現状は、今後韓国社会に戻ってこない人材が増える可能性や
早期留学による外貨の流れなどを考えると、韓国社会の未来における危機も予感させる。

早期留学の原因が英語教育だけに起因しているという認識から脱皮すること、とりわけ、
外国語科目を含む教育の目標を改善すること、現場においては良いプログラムを拡大す

ることで、教育現場の位置を取り戻すことに全力を尽くすべきである。その努力によって、徐々に私的教育を見直していくことも可能ではないかと期待せざるを得ない。

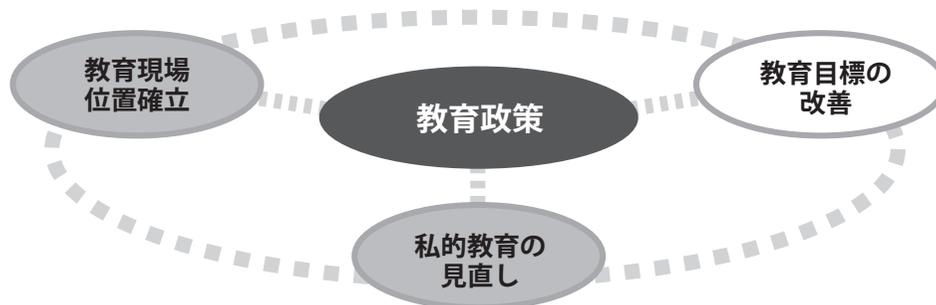


図2. 今後の教育政策

今後は、「雁パパ」側だけでなく、母親側および早期留学の本人である子どもにも焦点を当てた横断的研究が十分なされることで、早期留学による言語的およびアイデンティティ形成の問題についてより深く究明していく必要があるだろう。つまり、未来を背負っていく人材を輸出するばかりの国にならないよう、新たな教育の方向性をより具体的に模索していく必要性が求められていると思われる。

注

- 1) 早期留学とは、小中等教育段階の学生が外国に行って、外国の教育機関で6ヶ月以上にかけて修学することを指す。
- 2) 1955年当時は「文教部」という名称で、以後「教育部」という名称変更を経て、現在の「教育人的資源部」の名に至っている。
- 3) 「雁パパ」のなかでは経済的余裕の度合いによってまたもやレベルが分かれる現状（「鷺パパ」や「ペンギンパパ」など）もあり、筆者が取ったデータが必ずしも「雁パパ」の現状を代表しているものとは言えないことは断っておきたい。
- 4) L2さんは子どもをソウルに送って勉強させている状況、Y2さんとK2さんの子どもはまだ学校教育を受ける年齢に達していないものの、かつて本人が留学した所から韓国に一人で帰国し妻と子どもは当分現地に残っていた時期がある経験を持っている。
- 5) アイデンティティは個人のみならず、文化、国家レベルにも適用するものであり、本稿

で用いるアイデンティティとは、個人的・文化的・国家的アイデンティティの総称としてみている。

参考文献

- Lenneberg, H. (1967) *Biological foundations of language*. John Wiley & Sons.
- 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 スリーエーネットワーク
- コリン・ベーカー 著、岡秀夫 訳 (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店
- 김양희, 장운정 (2004) 「장기 분거 가족에 관한 탐색적 연구 - 기러기가족에 초점을 맞추어 -」 『한국가족관계학회지』 제 9-2
- 엄명용 (2002) 「장기 분거 가족의 전문직 남성문제 ; 기러기 아빠」 『한국가족치료학회지』 제 10-2 pp. 25-43
- 조은 (2004) 「세계화의 최첨단에 선 한국의 가족 ; 원정유학 모자녀 가족 사례를 중심으로」 『학술진흥재단연구보고서』
- 최양숙 (2005) 『조기유학, 가족 그리고 기러기아빠』 한국학술정보 (주)

(冲縄国際大学)

Early stage studies abroad and foreign language education policy in Korea

LEE Hyun-Jung

Recently, the number of youth studying abroad has been increasing in Korea. This is known as “early stage studies abroad” which often make family members live separately like a mother and her child go abroad and a father stays alone in Korea sending living expense accounted for more than 70% of his income to his family. This study focuses on the fathers of those families so called "Kirogi Appa (“wild goose daddies”) and examines their attitudes behind the decision to choose “early stage studies abroad” to make their children bilinguals in the current movement toward bilingualism closely related to the policy of foreign language education in Korea. This paper discusses the future prospect of foreign language education through their attitudes.

(Okinawa International University)